

内山節著作集

全15巻

自然と人間のゆらぎのなかで、新たな共同を模索する
すべての人に贈るしなやかな思想

労働過程論ノート

山里の釣りから

戦後日本の労働過程

哲学の冒険

自然と労働

自然と人間の哲学

続・哲学の冒険

戦後思想の旅から

時間についての十二章

森にかよう道

子どもたちの時間

貨幣の思想史

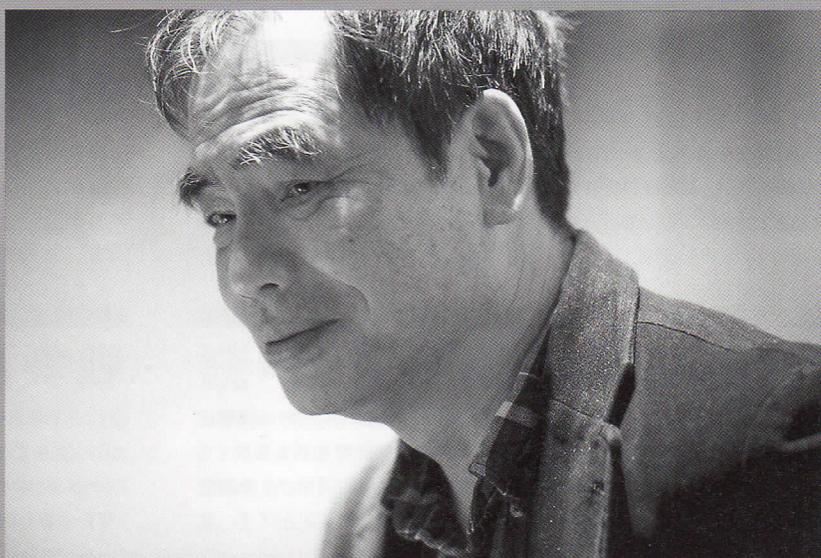
里の在処(ありか)

戦争という仕事

共同体の基礎理論

哲学の研究をはじめてからの私の課題のひとつは、新しい関係論の創造であった。その問題意識は、関係のありようがどのような実体をつくりだしていくのか、という視点に集約されていた。『自然と人間の哲学』は最初の本である『労働過程論ノート』の刊行から十二年後の、私が三十八歳になったときのものである。はじめて自然哲学に取り組んだ本でもあったが、ここでも軸に据えられていたのは関係論であった。この世界をつくりだしている自然と自然の関係、自然と人間の間、人間と人間との関係が相互性を形成しながら、どのような自然の世界と人間の世界をつくりだしているのか。いわば、関係が実体をつくりだしていく様を私は考察しようとしていた。私がおこなってきた研究は、そのすべてがこの方法を根底においている。それは個体中心主義的な哲学への批判でもあり、これまで私が出会ってきたさまざまな人々、たとえば農業や農村との関係をとおして農民という個人をつくりだしてきた、そんな人々が私に教えてくれたことだったのかもしれない。

——内山節



©SANAKA OKAMOTO, 2014

農山漁村文化協会(農文協)



四六判上製
各巻平均300頁
本体2,700円~2,900円
全15巻揃価
本体42,000円

全巻予約受付中！ 2014年7月より刊行開始

第1回配本・第6巻 自然と人間の哲学 / 第2回・第2巻 山里の釣りから (9月) /
第3回・第8巻 戦後思想の旅から (11月) / 第4回・第11巻 子どもたちの時間 (2015年1月) /
以後毎月発行、2015年12月完結予定。

第1巻

労働過程論ノート 2900円

人間の存在を労働過程としてとらえ、労働過程を賃労働の世界から労働存在の世界に変えることから人間の解放を展望する、最初の単行本 [初版田畑書店1976年、増補新版1984年]。ほかに「労働過程」という言葉を初めて使った書評や「労働過程と政治支配」など4編を収録。

第2巻

山里の釣りから 2900円

川を水問題ではなく「流れの思想」からとらえ、山里の労働と暮らしを労働の二面性からとらえる。その後の諸著作の出発点となった記念碑的作品 [初版日本経済評論社1980年]。ほかに「岩魚が老いる」「ヤマメ釣り講義」など釣りにかかわるエッセイ5編を収録。

第3巻

戦後日本の労働過程 2900円

経済学とは別の立場から、現実の社会のなかで生きる労働者の存在をとらえようという問題意識に立った、内山としては珍しい現状分析論 [初版三一書房1982年]。ほかに「戦後の労働者の労働意識と労働観」など、労働・労働者にかかわる論考5編を収録。

第4巻

哲学の冒険 2800円

15歳の「僕」が記す「哲学ノート」という形で、自分の現実的な存在に対する迷いが哲学の扉を開くことを描いた異色の哲学入門。[初版毎日新聞社1985年]。ほかに「哲学のロマン」(『毎日中学生新聞』連載)、「自然のなかの友人たち」(『ハイミセス』連載)を収録。

第5巻

自然と労働 2800円

エッセイという形式で存在論、労働存在論、労働過程論を、現代というフィールドのなかで再出発させる試み。冒頭の「ヤドカリ」はとくに有名 [初版農文協1986年]。ほかに「現代への旅から」(『信濃毎日新聞』連載)より単行本未収録の29回分を収録。

第6巻

自然と人間の哲学 2900円

自然との共生に敗北したいまこそ、自然と人間、そこでの労働の意味を問い直さなければならないと、現代における自然哲学の構築を目指した、内山哲学の核となる作品 [初版岩波書店1988年]。ほかにこの作品の元になった『思想』掲載の論文「自然哲学・ノート」を収録。

第7巻

続・哲学の冒険 2700円

1960年代後半の著者自身の哲学史—精神史をたどる。人間性喪失への不安にかられた高校生が「近代における人間存在からの解放」という重い課題を背負う哲学的自伝 [初版毎日新聞社1990年]。ほかに「月曜の手紙」(『エコノミスト』連載、全105回)を収録。

第8巻

戦後思想の旅から 2700円

戦後に生まれ、高度成長期に少年時代を迎えた世代にとって、戦後社会・戦後思想とは何だったかを問う。「民主的」な戦後社会に潜む管理と自由の喪失をあぶり出す [初版有斐閣1992年]。ほかに「合理的思想の動揺」「日本の伝統的自然観について」など3編を収録。

内山節著作集

全15巻

——高度経済成長が終わった1970年代後半から、自然と人間の交通としての労働論を軸に、近現代を超える独自の思想を形成してきた内山節の真髓をなす著作を収録。品切れ本も多く貴重。

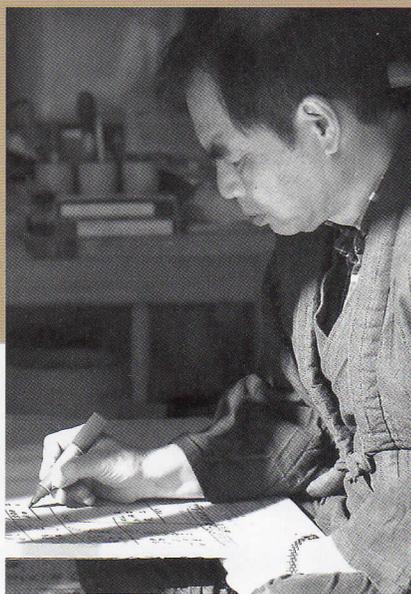
——全巻に著者自身による現代的視点からの解題付き（平均10頁）。

——全巻に表題作（単行本）ともに、関連する単行本未収録の雑誌論文・エッセイ、新聞連載や共著書などから精選して収録。単行本の理解が深まる。

——9巻、12巻、15巻は単行本にはない新たな章を書き下ろす。

内山節 ◎うちやま・たかし

1950年、東京生まれ。哲学者。『労働過程論ノート』（1976年、田畑書店）で哲学・評論界に登場。1970年代から東京と群馬県上野村を往復して暮らす。趣味の釣りをとおして、川、山と村、そこでの労働のあり方についての論考を展開、『山里の釣りから』（1980年、日本経済評論社）に平明な文体で結実する。そこでの自然哲学や時間論、森と人間の営みの考察が『自然と人間の哲学』（1988年、岩波書店）『時間についての十二章』（1993年、同）『森にかよう道』（1994年、新潮社）などで展開された。NPO法人・森づくりフォーラム代表理事。『かがり火』編集長。「東北農家の会」「九州農家の会」などで講師を務める。2010年4月より立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授。



第9巻

時間についての十二章

2800円

直線的に過ぎ去っていく「時の矢」としての時間と、循環する時間の違いをとおして、「山里の時間」から「存在としての時間」をとらえた時間論【初版岩波書店1993年】。新たに1章を加える。ほかに「労働と自然」「『真理』が価値を失った時代に」を収録。

第10巻

森にかよう道

2800円

知床から屋久島まで日本全国の森を訪ね、自然条件や地域の暮らしとの関係で姿を変える森をとらえ、希薄になりつつある「森と人間の営み」の回復を展望する【初版新潮社1994年】。ほかに「森にかよう道」（『信濃毎日新聞』連載）より単行本未収録の14回分を収録。

第11巻

子どもたちの時間

2700円

生活のなかで成長した山村の子どもたちの姿は、近代的学校制度が村の循環的な時間をこわすことで失われていった。時間論から根源的な教育批判を展開する教育論【初版岩波書店1996年】。ほかに「戦後思想と戦後教育」「『学び』の時間と空間の再構成」など教育論4編を収録。

第12巻

貨幣の思想史

2800円

欧州近現代の経済思想家たちは「貨幣と人間の関係」をどうとらえたかを辿り、「貨幣をめぐるジレンマ」を近代思想は克服できないことを明らかにする【初版新潮社1997年】。新たに1章を加える。ほかに「古典経済学の思想史から見える『お金』の不思議」など貨幣にかかわる論考3編を収録。

第13巻

里の在処（ありか）

2700円

上野村に20数年通い続けたのち、在処として古い民家を譲り受けた著者が、四季折々にむら人と交流する姿を小説風に描く。上野村に「むらの精神」を見た珠玉の作品【初版新潮社2001年】。ほかに「いまフランスの山村では」（国土庁調査報告）「多層的精神のかたち」など3編を収録。

第14巻

戦争という仕事

2900円

現代の労働には「戦争という仕事」と共通する何かがある。そこから仕事をどのように改革すれば自然と人間が無事に暮らせる世界がつくれるのかを問うていく【初版信濃毎日新聞社2006年】。ほかに「戦争という仕事」（単行本と同名の論文）「歴史の変わり目を感じる」を収録。

第15巻

共同体の基礎理論

2700円

「封建遺制」とみられた共同体が、「むらの精神」に寄り添うことで、自然と人間の基層から未来を切り拓く可能性として鮮やかに浮かび上がる【初版農文協2010年】。新たに1章を加える。ほかに「市民社会と共同体」を収録。年譜・著作一覧付き。

* 価格は本体価格。併録する内容は予告なく変更する場合があります。